

昭和三十三年の茅葺屋根の葺き替え 二 作業編

志村 良知

屋根替は、まず家全体を覆う足場を組み、まきの衆と爺様の子分衆が参集して古い屋根を剥がすところから始まった。煤と埃が体中の穴と皺にたまるという「与太つ仕事」である。この時出る、煤が沁み込み縄目が残った煤竹は趣味人に珍重される。

骨組ごと屋根を取り去つたら、職人の手で新しい丸竹と荒縄で屋根の骨組が作られる。職人と言っても心得のある村のおっちゃん三人で、彼らが歳取つて高所作業が出来なくなるというのも最後の屋根替と言われた所以だった。

骨組ができる、軒先の方から麻紐で直径十センチほどに束ねた麦藁を荒縄で縛り付けていく。これは茎が堅い茅と骨組のいわば接着剤である。その上に軒先の方を根元にした茅を厚さ三十センチ位に重ねて上から屋根巾一杯の割竹で押さえ、下の骨組みの丸竹に銅線で縫い付ける。ミシン針のように先端に穴がある背丈ほどの長い針に銅線をつけて突き刺す。屋根の裏側で受け取り丸竹の反対側に再度突き刺してくる針に通す。合図とともに屋根上の職人が引き上げ、割竹で挟み付けて蹴りながら締め上げる。

この屋根裏での仕事は体が軽く柔らかい若い弟子の役であるが、当時はもう弟子はおらず私の仕事だった。狭く暗い屋根裏の棟木の間に組まれた足場を跳び回って三人の職人の針の相手をするのはかなりの重労働だった。針で刺されたり、銅線通し中に引つ張られると大怪我になるので、どこにいるか、何をしているかは、職人たちと慎重に手順と合図を決めていた。

茅を固定し終えたら刈込である。茅は根元の方を軒先と切妻の両端に向けてある。このため角度を変えつつ斜めに固定している場所もある。これを大きな植木鉢で刈り込み、屋根全体を一つの平面に仕上げる。少しでも凹凸があると見栄えが悪いだけでなく雨水が滞留して雨漏りの原因になる。そのため職人は朝、焚火の周りで一時間以上もかけて一人何丁もの刈込み鉢を研いだ。鉢研ぎは難しく、私も習ったが合格点はもらえなかった。